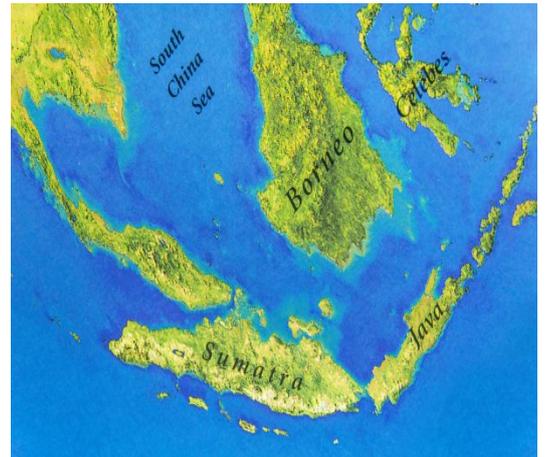


## ボルネオのキナバル山紀行

「ボルネオ」と言えば、中学校の社会科の授業だけに「ボルネオ、スマトラ、ジャワ、セレベス」のように“わけもなく記憶させられて”以来ほぼそれっきり。戦時中に日本軍が進駐していたことくらいは知っていましたが、一般の日本人にとってはあまりゆかりのない“近くて遠い南洋の島”だと思っていました。ですから、いくつかの日本のツアー会社が、日本人が参加しやすいパッケージツアーを組んでいて、多くの日本人がボルネオ観光に訪れていようなどとは思っていませんでした。しかし、ボルネオ島の面積は 725,500km<sup>2</sup>で日本の国土の約 1.9 倍の大きさであり、世界の島の中では、グリーンランド島、ニューギニア島に次ぐ、面積第 3 位の島だということ。更に、インドネシア・マレーシア・ブルネイ、この 3 か国の領土であり、世界で最も多くの国の領地がある島ともなっていることなどご存知の日本人は少ないのではないかと思います。



そしてキナバル山。ボルネオ島の北部、マレーシア領のサバ州にある山で、標高 4,095.2m はマレーシアというより東南アジアの最高峰なのです。イギリスの植民地施政官、博物学者であったヒュー・ローが 1851 年に初登頂し 76 種の新種の植物を採取したのだそうですが、世界でも有数の生物多様性に富み、6000 種以上の植物と 100 種以上の哺乳類が確認されているとのこと。



キナバル山は富士山と同じ山脈に属さない独立峰です。同じ独立峰でアフリカ大陸の最高峰キリマンジャロ(標高 5,895m)と違って、麓の緑が豊かで田畑が見えるところは富士山とそっくりで、「南洋の山」というより、やはり「アジアの山」なんだなあという気がします。いざ、キナバル公園入り口で入場料を支払った後、キナバル公園本部で受付を済ませ、ここでは義務付けされている登山ガイドの合流を得て歩き始めると、いきなり滝があったり、いくつか急な階段があったりしますが、これは「日本の山」でも珍しいことではありません。更に、登山道が良く整備され、約 50 分おきに屋根のついたシェルターとトイレがあるところから見ると、「日本の山」より洗練された「欧米の山」のような感じがしてきます。

しかし、山の麓が熱帯雨林特有のジャングルとなっているところがさすが「南洋の山」です。ボルネオ島はアルプス・ヒマラヤ造山帯と環太平洋造山帯の交点にあたる地域に位置し、この熱帯雨林も世界最古の熱帯雨林だそうです。熱帯雨林から高山帯まで特異な動植物が数多く存在していて、山麓のジャングルでは、世界最

大の花とも言われるラフレシア（下左）、食虫植物として有名なウツボカズラ（下中）が原生しています。また、熱帯らしい鮮やかな緑色が目立つボルネオ固有種の鳥ボルネオタンビヘキサン（下右）の姿も見えます。さすが、山域がキナバル自然公園として、ユネスコの世界遺産（自然遺産）に登録されているだけのことはあります。



ちなみに、キナバル国立公園からは4,000種の植物が報告されているそうです。そのうち1,000種がランの仲間、ツツジ科の植物は24種をこえているのだとか。下の写真をご覧ください。左からシャクナゲの仲間、セロジネ・パピロサ、キナバル・パルサム、ネックレスオーキッド、バンブーオーキッドです。山行中には、こうした綺麗な花々と代わって一癖ありそうな奇怪な花々が顔を見せてくれるのが楽しいところです。



約1キロメートルおきにある簡素な屋根付きのシェルターでは、かわいらしく人懐っこいリス達が、エサのおこぼれをもらおうと寄ってきます。「南洋モード」に浸りながらゆっくりと歩いてきたのですが、気が付いてみると、うっそうとした熱帯雨林のジャングルから次第に低木となり足元の岩も大きくなってきています。標高はいつしか3,200m 台後半。振り返ればすでに雲の上ではありませんか。そして、やがて今宵の宿りの（標高3,272m）に到着しました。“山小屋”をイメージしていたのですが、ちょいとしたホテルです。1階にはレストランの他に売店があって、標高3,000mとは思えないほどの品揃がされています。2階が宿舎になっていますが、部屋は2段ベッドが2つずつ配置されている4人部屋。ですから、日本の山小屋のように、定員を超える大勢の宿泊客が雑魚寝を強いられることがないわけです。ボルネオ島には、イギリス人の他にオランダ人が入植していた歴史があるようです。キナバル山に残る「欧米風モード」は、この山が欧州人に格好の登山対象として愛されてきたことの名残なのかもしれません。

さて翌朝。午前2時には山頂を目指しラバンラタレストハウスを出立します。常夏とはいえ標高3,000m超の山の朝はとても寒く、冷たい風で自然と身体が目覚めます。真っ暗な道を、ヘッドライトを頼りにゆっくりと歩を進めて約1時間も歩くと、岩肌にかかったロープや鎖をつたって登る場所も現れます。キナバル山は、地下深部から超塩基性岩や堆積岩を貫いて上昇した溶岩が固まって1千万年前に造られた山だそうです。溶岩の上昇に伴って山体が大きく変形し、更に、1万年前までの氷期には山頂付近に氷河が存在し、花崗閃緑岩を削り滑らかな岩肌にしたと考えられているのだとか。高度が高い割に登山に当たって技術的に難しい所がないのはそのためかもしれません。

やがて巨大な一枚岩の上に立てば、左手にはサウス・ピーク (South Peak)、ロバの耳のようなドンキーイヤーズ・ピーク (Donkey Ear's Peak)、アグリーシスター・ピーク (Ugly Sister Peak) などが現れ、山頂となるローズ・ピーク (Rose Peak) の急な岩場を登る頃には空が白みはじめ、キナバル山の全貌が見えてきます。そして、岩ばかりのゴツゴツと荒涼とした世界が、やがて赤い色に染まり始めます。標高 4,095.2m の山頂で、目の前に開けてきた景色の幻想的で荘厳な美しさはただ見とれるばかりです。



帰りも、簡単なロープ場こそありますが、その昔氷河が花崗閃緑岩を削ってできた滑らかな岩肌のお陰で、楽で爽快な下山を楽しむことができます。このように、特別な登山の技量がなくても、たやすく標高 4,000m 超の山行が楽しめるところが「海外登山の入門に最適な山」として人気を博してきたのかもしれない。海面からの標高差が 4,100m ですから 100m ごとに 0.6℃と見ると、頂上と海面の温度差はおよそ 25℃。同じボルネオ島なのに、山上では時折寒さを感じながらトレッキングに汗を流しているかと思うと、山麓の海ではマリンスポーツが楽しめるわけです。素晴らしいなあ、ボルネオ島の豊かな自然。かつてキナバル山登頂したことがあるという篠窪弘行兄 (4 組) もこの地で充足した時を過ごされたご満悦だったことでしょう。私だって結構、キナバル山紀行を楽しむことができましたよ。バーチャルでしたけど。

